

金賞受賞作品

失われたスパゲツテイ

山本パスタ

「うわ、このイチゴパンピンククレープっていうのおいしそうじゃない？」

「ほんとだ！ ね、これにしようよ。すみません、これ二つ下さい」

空がだんだんと茜色に染まり始めた頃、シヨッピングセンターの駐車場に停めたピンクでファンシーな車両の中で、僕はクレープを焼いていた。辺りにはクレープの甘い匂いが漂っていて、それにつられた二人組の女子高生がやって来たところだ。期間限定の秋の新メニューとして売り出しているイチゴパンピンククレープの売り上げは好調で、この日も仕入れたかぼちゃは全て捌けてしまいそうではとす。この商品の魅力はなんといっても利益率の高いとことだ。販売側にとって優しい商品ということ。「期間限定」などと銘を打ってアピールしておけば多少高くてもそれなりに売れるものなのだ。材料費は他のフルーツ系のクレープと大差ないけれど、売値は二割ほど上乘せしてある。お客だつて高いのを分かっている、新メニューを堪能する為に代金を支払っているのだから何も問題はないはずだ。今の彼女達だつて、おいしそうだね、奮発して良かったね、とキャイキャイ言いながら満足した様子で帰っていった。

気がつけばすっかりとぼったくりクレープ屋になってしまった僕だけど、なにも楽しんで儲けたいからという理由でクレープ屋を始めたわけじゃない。儲けたいだけならクレープ屋なんてものを選ぶことはないと思う。元々はクレープが大好きで、美味しいクレープが作りたくて始めた仕事だった。だけど実際にやってみると、そんなものは甘い考えだということを思い知らされた。とにかく場所代が高く、びつくりするような料金を請求される。このシヨッピングセンターなんか少し寂れててたいして人の集まる場所じゃないのに、契約料で売り上げの三〇%近くをもっていかれてしまう。それでも他に営業できる場所が見つからないので仕方がない、背に腹はかえられないのだ。この近くにクレープ屋はないけれど、軽食販売のお店は多く競争も激しい。開業したときに抱えた借金もある。とにかく売りが最優先になってしまっている。僕の中にあつた美味しいクレープを作りたいという思いはいつしかすっかり褪せてしまった。今は仕方がない、それはいつかお金を貯めて店舗を構えたときにやればいいんだ。そう自分に対して言い訳をしているけれど、きっとこのままではそんな未来は訪れないということはおかっている。

そんなことを考えていると僕の気分はすっかりと落ち込んでしまった。これはよくないと頭を切り替えようとしたけれど、一度考え始めたことは、油分が足りず鉄板にくっついてしまったクレープ生地のようになかなか頭から離れてくれない。僕がそのクレープ生地と格闘していると、カウンターの向こうから丸いおでこと二つのお団子がびよこんと飛び出してきた。

「おにいさん、ソフトクリームをください」

その可愛らしい声の主は、この近所に住んでいるという小学生の子秋ちゃんだ。彼女は、ほぼ毎日のように夕暮れ時になるとソフトクリームを買いに来てくれる常連さんで、僕はそのキラキラとした瞳の前ではどうしても弱くなってしまう。女子高生相手には不当に高いクーポンを平気で売りつけてしまうような僕だけど、せめてこの子に対してだけは誠実でいたいと、そう思っている。誠実といっても、ソフトクリームを巻くときに少量でも大きく見せるテクニクを使わないとか、コーンの中に空洞を作るテクニクを使わないとか、その程度のことだけだ。

「はい、おまたせ」

出来上がった僕のせめてもの誠実さを渡そうとすると、彼女はピクリとも動かずに真剣なまなざしでじつと空を見つめていた。

「何を見ているんだい？」

「見て、あの雲ソフトクリームみたいだよ」

彼女の指さすその先、赤く染まった空にいくつか雲が浮かんでいて、その中に一つ、うねうねとした形のものがあった。言われてみるとそれは確かにソフトクリームに見えないこともない。

「あれはオレンジ味かな。でもコーンはどこにいつちゃったんだろな」

「コーンのところがおいしいのね！」

そう言いながら彼女は受け取ったソフトクリームをペロリと舐めて満面の笑みを浮かべた。僕も小さな頃には、雲が流れて次々と形を変えていく様子が不思議で夢中になって空を見つめていた。あの雲はわたあめで、あの雲はお魚で。そんな風に想像して遊んでいた記憶がある。今では天気の心配をするとき以外に空を見上げることはほとんど無くなってしまったけれど。

僕がぼんやりと空に浮かぶソフトクリームを見つめていると、彼女は先ほどとは少し違う方向の空を指さした。

「あっちにはスパゲッティがあるよ」

「スパゲッティだって？」

「うん、ミートソースだよ」

彼女の言葉に僕はすっかり戸惑ってしまふ。ミートソースというのはわかる。夕焼け色に染まった雲をミートソースの色に見立てているのだ。けどスパゲッティって何だ？ 麺類の形をした雲だなんて僕にはまったく想像できない。彼女の指さす空を見ても、ただの雲が浮かんでいるだけでスパゲッティなんてどこにもない。だけど彼女は確かに空にスパゲッティがあると言っつ。

彼女に見えて、僕には見えないもの。

彼女にあつて、僕にはないもの。

それは例えばキラキラした瞳や、美味しいクレープを作りたいという思い。純粹でひたむきな気持ち。いつの間にか僕が失ってしまったかけがえのないものが、今、スパゲッティの形をしてあの空に浮かんでいるんだ。そのスパゲッティさえ見つけることが出来れば今からだってきつとやり直せる、そんな気がした。でも僕にはその見つけ方が分からない。少しでも近づきたくて、背伸びをして空に向かって目一杯に手を伸ばした。だけどその手は宙を掻くばかりで、指先に触れるものは何も無い。やはり今の僕にはどんなに目を凝らしてもスパゲッティは見えない。それでも諦めきれずに必死になって探した。スパゲッティ、スパゲッティはどこだ――。

失われたスパゲツテイ

作者 山本パス夕

第四回「俺的小説賞」応募作品 22 金賞受賞作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。
無断転載は禁止しています。